7．講師による「とっておきのもう一言」

講義動画配信後に、講師によるディスカッションを実施した。
講義部分では、触れられなかった、各々の委員の想いを伝えてもらった。

座長から

【改めて講義を見て気付いたこと　付け加えたい一言をお願いします】

講師から

- ソーシャルワーカーにとってもっとも必要な資質は待つ力、忍耐力だと思います。依存症支援に限らずソーシャルワーカーの仕事は思い通りにいかないことの方が多いです。耐えしのぐ力、耐えるだけではなく、やり過ごす技術も必要です。晴れ間にそなえていかなければならない。そのために必要なのが対人スキル。どれだけ制度を知っていたとしても社会資源、ネットワークを持っていたとしても、クライエントと関係を作り、やる気になってもらう対人スキルがないとそれらを活用できません。ソーシャルワーカーは対人スキルのプロでなければならない。対人スキルをもっとも深く見つめていた分野が依存症だと感じています。
- とあるクライエントからの忘れられない一言があります。「あなたも依存症になる資質があるね」と。どうしてだろうと考えたときに、自分自身の自己肯定感の低さ、弱さをさらけ出すことの怖さがあったことに気付きました。自分自身のことを見抜かれていたのだなと思います。自助グループなどクライエントの回復を支援していく楽しさもある一方で、自己覚知し、自分自身の在り方が変化していっているなと実感できる面白さもあります。依存症支援を始めて最初の頃は、特に共感してくれる仲間の存在は大きかったです。
- 他の委員のお話を聞きながら、やはり依存症支援はおもしろいなと思いました。依存症支援だからこそ人間深いところにかかわれて、そういったところが醍醐味だと思います。一番伝えたいキーワードをあげるとしたら「仲間」というところかと思います。依存症の方は、生きづらさを抱えています。依存症は、人とのつながりのなかで回復をしていくもの。私たち自身も同様に依存症支援をしていくなかで仲間が必要だと感じています。
- クライエント一人ひとりの人生に何があるのだろうと想像をしてほしい。どんな人生を歩んでいくのか、その人らしい人生とは何か深く考えていく仕事がソーシャルワーカーの仕事。依存症の方を支援していくなかで自分の気持ちが動くときがありました。それは、自分自身の生い立ちも影響しています。学生の皆さんもこれから仕事をしていくうえで、自分の気持ちが動いたときに考えを深めてもらいたいですね。
- 講義では、依存症の歴史の部分を話しました。人とアルコール、社会と依存症の問題は、昔からテーマでありました。あらゆる国が法律で禁酒をし、宗教的に禁止し、流通をコントロールしてきました。個人が治療して治ればいいということではなく、社会問題と

して、マクロな視点も持ってほしいです。

- 依存症支援で使う技術、個人には動機付け面接、家族にはCRAFT。聞きなれない言葉だと思います。教科書には載っているが中身は大学では詳しく教えていない。依存症に特化したスキルではなく、ソーシャルワーカーとして身に着けておきたい援助技術でもあります。否認抵抗を前提とする人との面接のときに動機づけを上げる面接力が求められる。家族療法的なアプローチも必要になってきます。現場に出たとき、ぜひ意識して学んでほしいと思います。
- 目の前のクライエントの回復を信じられないこともありました。そんなときに自助グループで語られていたのは、仲間がいて幸せという言葉。依存症問題の他にも沢山の問題がそこにはあったが仲間とつながることで回復していきました。どこかにつながっていればいつか回復していくと考え、対応すると燃え尽きないと思います。

座長から

【２つのエッセンスがありました。１つは対人スキル、もう１つは想像力。自尊感情の低さや環境の問題で自分の体験から支援者として向き合ってきたという委員もいました。対人援助をやる前に内面的な問題と向き合う力が必要になってくるのでしょうか？】

講師から

- 自分自身のこれまでの人生で何かしら問題があったということはありませんが、クライエントの背負ってきた背景を理解しようということは大事だと思います。今まで自助グループのなかで話を聞いてきましたが、人によってストーリーが違います。この人のストーリーはどうだっただろうと想像しようとする態度が重要。そのうえで、対人スキルがあるとより磨かれていくと信じて仕事をしています。

座長から

【真摯に他の人の話を聞くことで想像力は磨かれていくのでしょうか？】

講師から

- 想像力と対人スキルの両輪が必要だと思います。回復といっても十人十色。人の話をしっかり聞くことが前提。いろんなイメージを持って、依存症になった環境を想像していくことが大事だと思います。
- 目の前のクライエントの生きづらさを聞いていくことで、「そういえば私もこういう問題あったな」と後で気づかされたことが多かったです。積み重ねで聞いていくことで想像力も磨かれていくのかなと思います。
- どういう言葉が相手に届くのか悩んだ時期もありました。スキルだけではなく、自分のなかにあるハートの部分が大事。スキルだけでは人は動かない。正解とか不正解ではなく、その状況を受け入れてみることが大事。そのうえでクライエントのことを想像してみる。生活がなんか変わったなと一言出てきたとき、一歩進んだなと感じますね。

座長から

【私たち支援者もクライエントも挫折があります。思い入れが強くてうまくいかないこともあるかもしれない。そんなとき、専門職としてどうしているのでしょうか？】

講師から

- 学生は、自己覚知を指導されます。対人援助職のスキルの前にベースになるのが自己覚知。ソーシャルワーカーである限り続きます。困難だった場面で自分と向き合うことになる。特別な問題がない家族でも子どもの成長の変化などで家族危機が起きます。そんなときに、自分がどんな役割でどんな子どもであったのかちゃんと見つめられることが大切。それが家族や本人を理解するときに役に立っていきます。ソーシャルワーカーにとって自分自身の問題、苦しかった体験は、共感する種になることもあります。20代のときに、疲弊しバーンアウトした仲間がいました。そんなときにアルコール問題にかかわる援助者の自助グループを作り、安全な仲間のなかで語ることができました。2、３年で終わりを迎えましたが、その後、スキルを磨くために研修に出たり、進学したりとそれぞれスキルアップをしていきました。いかに正直に語るか。いかに私たちが正直になるかということが大切だと思います。

座長から

【依存症に対して何か改善策はありますか？】

講師から

- 依存症の方に限らず、SOSが出せたかどうか問題。SOSが出せるとうまくいくことが多いです。しかし、SOSが出しにくい、出せない。出したことによって馬鹿にされたり、失敗した経験があるため適切なかたちでSOSが出させないことが多い。小学校、中学校、初期教育できっちりとSOS出しても良いという価値観を伝えることが大事です。またSOSが出たときに、ちゃんと受けてとめるのが当たり前だと大人が見せていくことが重要になってくると思います。
- もっと早く依存症のことを知っていればよかったと家族から言われたことがありました。１人でも多くの人に病気のこと、回復できることを伝えていきたい。全て１人でやるのは難しいので仲間が必要です。
- １人でも多くの回復者の方を地域で見守っていくこと、回復者がたくさんいることを知ってもらうこと。回復している人を社会に知らせていくことが大事だと思います。
- 生きづらさはみんなもっている。対人関係がうまくいかない、コミュニケーションがうまくいかないなど。しかし、それが依存症の理解をすることに役にたつ。今日参加された学生の皆さんが依存症のことを知ることで世の中が変わっていくと思います。
- 臨床のなかで、半分以上が家族相談でした。日本は、家族の役割や義務が求められることが多いです。男女ともどちらも生きづらい。個人主義が当たり前になり、役割から解放される社会であった方が良いと思います。

座長から

【依存症に限らず助けてと言ったときに耳を傾ける人が少ない。学生の皆さんは、相談支援の窓口で働かれる人が多いと思います。相談を受けたときに、その人の人生が変わることを思って働いてほしい。助けてと言いやすい社会を作り出すこと。また、助けられた人たちがいることを社会に向けて知らせることも大事だと思います】

8．参加大学生等とのグループワーク

講義等を受けて、依存症や依存症支援について感じたこと、考えたことを自分の言葉で表現すること、他者と共有し相互理解を深めること等を目的にグループワークを実施した。参加者は38人で、1グループ5～6人で構成され、7グループに分けて行われた。各グループには検討委員会の委員を1人ずつファシリテーターとして配置し、グループの進行管理、論議を促す役割、フィードバックのためのコメントを行う役割を担当した。

参加者は年代、社会人経験の有無、参加動機、また背景に家族や知人に依存症問題を持つ学生など、多少の個人差はあるものの、各グループともに、主体的に参加し、積極的に発言する学生が大半であった。

話された中身も共通しており、依存症支援に関しては「依存症の背景への理解の大切さ」「生きづらさゆえの飲酒であることの理解」「家族支援の重要性」「地域や社会へのアプローチの必要性」などの教科書や書籍などで学んだことが、より明確なかたちになって理解できたと語られていた。また、依存症に対する知識・経験の不足や本人と家族の支援のバランスの難しさなど実際に関わる際の不安が語られたグループもあったが、それを自覚して学び続けること、理論に基づいた支援ができるよう研鑽を続けること、さらに卒後であっても専門性を磨くことが、クライエントにとっても不可欠などとすべてのグループで研鑽の必要性が語られた。これについては職能団体が主催したゼミナールの有意性が証されたともいえよう。また今後は自助グループなどへの参加をしたいとの声も多かった。

一方グループワーク自体が、他大学や異なる世代の学生との交流の場となり、意欲的な仲間に刺激を受けた、自分の考えを深めることができた、同じ志や葛藤を抱える仲間との出会いに安心感と向上心を持った、安全な場で自己を開示できたなど、場そのものが有意義であった印象がある。

ソーシャルワーカーの未来像としては「クライエントがSOSを出しやすい、信頼できるひと」「SOSが出されたときに、その人の背景も考えながら寄り添えるようにしたい」「個々の関わりを大事に、一緒に歩んでいきたい」「一人ひとりの人生を尊重し、権利を大切にしたい」「目の前のクライエントの自己決定や回復を待つことができ、不確実性に対する耐性をつけたい」「広い視野を持ちたい」「なんでも相談できるあたたかさのある安心できるソーシャルワーカーになりたい」「回復のきっかけになれるようにサポートしていきたい」「個別支援に留まらず、少しでも社会に影響できるソーシャルワーカーになりたい」などと現役のソーシャルワーカーが思わず襟を正したくなるようなソーシャルワーカー像が語られていた。

また、ソーシャルワーカー自体が仲間とつながりを持ち、自らが助けてと声を出せるよう、孤立しないことが大切との発言もあり、ソーシャルワーカーの成長過程に研鑽とネットワークを提供できる職能団体の重要性について、学生や養成機関に訴えていく必要性を改めて認識させられた。

9．効果検証のアンケートから

参加者に対して、このゼミナールの効果測定、各種報告や公表のための資料作成、今後の研修企画等の基礎データとして活用することを目的に、アンケート調査を実施した。

方法は、フォームメーラーによるオンライン回答とした。

最後まで参加していた者38人のうち、32人（回収率84.2％）から回答を得た。

結果概要

1）基礎情報について

①年代

20代（22）が多く、40代と50代（各3）、30代（2）、10代と60代以上（各1）の順であった。

②社会人経験

「あり（11）」よりも、「なし（21）」が多かった。

③将来、どのような進路を希望していますか？　以下から最も近いものを選択してください。

選択肢は次のとおりとし、一択での回答を求めた。

医療機関（精神科で、依存症支援を標榜している）／医療機関（精神科で、依存症支援を標榜していない）／医療機関（精神科以外）／障害分野（依存症支援を標榜している）／障害分野（依存症支援を標榜していない）／高齢・介護分野／児童・教育・若者分野／女性分野／労働 ・ 職域分野／司法分野／困窮者分野／社会福祉協議会行政（精神保健福祉）／行政（精神保健福祉以外）／その他／まだ決めかねている ・ 特に希望はない

多い順に、以下のとおりであった。

まだ決めかねている・特に希望はない	7
障害分野（依存症支援を標榜していない）	5
障害分野（依存症支援を標榜している）	5
医療機関（精神科で、依存症支援を標榜している）	4
行政（精神保健福祉）	3
医療機関（精神科で、依存症支援を標榜していない）	2
医療機関（精神科以外）	2
行政（精神保健福祉以外）	1
高齢・介護分野	1
司法分野	1
児童・教育・若者分野	1

2）ゼミナール全体について

①本日のオープンゼミナール開催を知ったきっかけを選択してください。

選択肢は次のとおりとし、一択での回答を求めた。

学校の先生からの紹介／実習先等のソーシャルワーカーからの紹介／友人からの紹介／チラシを見て／オープンゼミナールのPR動画を見て／本協会ウェブサイトを見て／本協会Twitterを見て／その他

多い順に、以下のとおりであった。

学校の先生からの紹介	25
実習先等のソーシャルワーカーからの紹介	3
本協会Twitterを見て	2
チラシを見て	1
その他	1

②オープンゼミナールのPR動画をご覧になられた方は、感想をお教えください。

「キャッチーで印象深かった」という好意的なものがある一方で、「ちょっと仰々しい」というものもあった。

③本日の内容は、理解できましたか？　以下から最も近いものを選択してください。

選択肢は次のとおりとし、一択での回答を求めた。

理解できた／少し理解できた／あまり理解できなかった／理解できなかった

多い順に、以下のとおりであった。

理解できた	26
少し理解できた	6

④本日の内容に、満足できましたか？　以下から最も近いものを選択してください。

選択肢は次のとおりとし、一択での回答を求めた。

満足／少し満足／やや不満／不満

多い順に、以下のとおりであった。

満足	27
少し満足	4
やや不満	1

⑤本日のオープンゼミナールで、依存症関連問題に関する正しい知識は増えたと感じますか？　以下から最も近いものを選択してください。

選択肢は次のとおりとし、一択での回答を求めた。

かなり増えた／少し増えた／何も変わらなかった／以前から十分にあった

多い順に、以下のとおりであった。

かなり増えた	21
少し増えた	10
何も変わらなかった	1

⑥本日のオープンゼミナールで、依存症関連問題に取り組む必要性の認識は深まったと感じますか？　以下から最も近いものを選択してください。

選択肢は次のとおりとし、一択での回答を求めた。

かなり深まった／少し深まった／何も変わらなかった／以前から十分にあった

多い順に、以下のとおりであった。

かなり深まった	28
少し深まった	4

⑦本日のオープンゼミナールで、依存症関連問題に取り組む意欲は上がったと感じますか？　以下から最も近いものを選択してください。

選択肢は次のとおりとし、一択での回答を求めた。

かなり上がった／少し上がった／何も変わらなかった／以前から十分にあった

多い順に、以下のとおりであった。

かなり上がった	27
少し上がった	3
以前から十分にあった	2

⑧オープンゼミナールの時間は、いかがでしたか？　以下から最も近いものを選択してください。

選択肢は次のとおりとし、一択での回答を求めた。

ちょうど良かった／短かった／長かった

多い順に、以下のとおりであった。

ちょうど良かった	31
長かった	1

3）「ソーシャルワーカー物語」及び「アルコール依存症とソーシャルワーク」について

①最も印象的だったことについて、教えてください。

回答を分類すると、「依存症支援の汎用性」「依存症への正しい知識の重要性」「依存症支援における周囲への支援、社会への働きかけの重要性」「自己覚知の重要性」「人間への興味、愛情、想像力の重要性」への気づきについて、多くの記載が見られた。

例えば、次のとおりである（意味を変えない範囲で要約等を行ったもの）。

【依存症支援の汎用性】

・依存症はどの分野でも出会うことがある。
・依存症の学びの汎用性が高い。
・依存症支援について学びを深めることで、どの分野でも必要なスキルを身につけられる。

【依存症への正しい知識の重要性】

・依存症について正しく理解することが必要である。
・依存症の方は生きづらさを抱えており、依存することで生き延びてきた。
・教科書の事例のような支援の流れのみを考えるのではなく、当事者の方の人生に寄り添った考え方が必要である。

【依存症支援における周囲への支援、社会への働きかけの重要性】

・本人自身の問題というよりは、人が社会のなかでまた人の間で生きるときに起こる問題である。
・家族も回復の当事者である。
・周囲との関係性も含めての支援が大事である。
・当事者も支援者も仲間が重要である。
・支援者や社会がSOSを適正に受け止めて、必要な介入に至る地域づくりが必要である。

【自己覚知の重要性】

・自分自身がいかに正直に自分と向き合えるか。
・常識とは、18歳までについた偏見である。
・スキルだけでなく、自分の心も支援をするうえで大切である。
・対人支援職に必要なマインドやスタンスを磨く＝人間力を磨く。
・当事者を「変える」ことに関して、ソーシャルワーカーは無力だ。
・（講師の失敗談や葛藤を聞いて）失敗してはならない、問題はできる限り早く解決しなくてはならないという考えを改めた。

【人間への興味、愛情、想像力の重要性】

・「愛している」ということを伝えることが必要である。
・「人間って面白いな」「もっとこの人のことを知りたいな」という思いが必要である。
・「いつか回復する」と思う、（その人のことを）想像しようとする態度が必要である。
・過激な感情表出はSOSのサイン（SOSを適切な方法で出すことができないのかもしれない）と考えることが必要である。

②今後のあなたの進路等の参考になったことがあれば、教えてください。

回答を分類すると、「依存症支援への興味」「ソーシャルワーク、ソーシャルアクションへの動機の向上」について、多くの記載が見られた。

例えば、次のとおりである（意味を変えない範囲で要約等を行ったもの）。

【依存症支援への興味】

・依存症関連もしっかり勉強していこうと思う。

・依存症に関する諸場面に遭遇したときに、意識して活かしていける。

・依存症の分野に進みたい気持ちを大きくしてくれた。

【ソーシャルワーク、ソーシャルアクションへの動機の向上】

・支援者としての心がけを学んだ。

・今できる学び、AAなどのグループへの参加等をもっと増やしていきたい。

・家族支援や地域への啓蒙に関われる人材になりたい。

・当事者との関わりの場へのアウトリーチが必要である。

・「自分の生きづらさを話せる場所」を増やせるソーシャルワーカーになりたい。

4）グループワークについて

①最も印象的だったことについて、教えてください。

回答を分類すると、「仲間の存在の重要性」「他者比較による自己覚知」「ソーシャルワークにおける葛藤」について、多くの記載が見られた。

例えば、次のとおりである（意味を変えない範囲で要約等を行ったもの）。

【仲間の存在の重要性】

・熱意をもって勉強に取り組んでいる仲間がいて、安心感と向上心につながった。

・コロナ禍で交流ができなかったので、他大学の学生と交流をすることができてよかった。

・それぞれの考えや今後やりたいことなどを知ることができ、刺激になった。

【他者比較による自己覚知】

・講義を聞いて湧き上がってきた思いや考えを開示した上で他人の発言を聴くと、考えもしていなかった意見が述べられ、また考察が深まった。

・異なる見方、異なる世代の受け止め方があることが分かった。

・違う学校の違う学年の学生や社会人経験のある人の話を聞いて、非常に意識が高く、見習いたいと感じた。

・「言葉を伝えること」が一番の課題だと感じた。

・ファシリテーターに自分の考えを整理してもらい、助言をもらえたことが嬉しかった。

【ソーシャルワークにおける葛藤】

・本人の同意と家族の疲弊のバランスが難しいと思った。

・クライエントとその家族にどう関わっていくか。

・SOSが出しにくい一方、早期に介入しないと問題が深刻になり、時間が多くかかってしまうというジレンマがあると思った。

②今後のあなたの進路等の参考になったことがあれば、教えてください。

回答を分類すると、「ビジョンの具体化」「動機の向上等」について、多くの記載が見られた。

例えば、次のとおりである（意味を変えない範囲で要約等を行ったもの）。

【ビジョンの具体化】

・それぞれが思う必要なスキルや関わりを知ることができ、自分もその視点を大切にしたいと思った。
・自分の経験との向き合い方を悩んでいる最中であったこともあり、勉強になった。
・心の問題に対する相談支援の強化が目標である。

【動機の向上等】

・若い人たちに負けないように頑張ろうと思った。
・自分も素敵なソーシャルワーカーになりたいと思った。
・取り組もうとしていた引きこもり問題が依存症と重なる面が多いことがわかった。
・分野を福祉に限らずにソーシャルワークを生かしたいという話が刺激になった。
・日本精神保健福祉士協会に入って全国研修に参加したいと思った。

5）その他について

①本協会では学生も参加できる研修を開催していますが、どのような研修であれば参加したいか、教えてください。

研修の内容については、次のような回答があった（意味を変えない範囲で要約等を行ったもの）。

・専門職と学生による、支援の現実と理想についての討論や事例検討。
・ゲーム依存等の比較的新しい依存症。
・アディクションの問題を家族の視点で見ていくもの。
・現役ソーシャルワーカーのリアルな話。
・依存症当事者の話。
・若者がなりやすい依存症、精神疾患。
・発達障害、パーソナリティ障害、トラウマケア。

研修の方法については、次のような回答があった（意味を変えない範囲で要約等を行ったもの）。

・オンラインのイベント。
・グループワーク、自分以外の意見が聞ける機会があるもの。
・お金がかからないもの。

②上記以外で何か感じたこと等があれば、教えてください。

次のような回答があった（意味を変えない範囲で要約等を行ったもの）。

・参加できてよかった。また参加したい。
・現役ソーシャルワーカーの実践を聞けたことはとても大きな体験となった。
・アルコール依存症支援以外についてエピソードも聞きたいと思った。
・依存になる背景には生きづらさや葛藤があるという話を聞けてよかった。
・今後、戦争や災害で依存症が増える可能性があり、社会的対応の必要が高まると認識した。

結果まとめ・考察

対象者を学生としたこともあり、比較的若い未就労者層からの参加が多く得られた。ま

た、依存症に興味がある者が集まったわけではなく、進路未定の者や、依存症支援を標榜していない機関を進路の希望とする参加者も多く、「必ずしも依存症に興味があったとは言えない」層に対する依存症啓発の場となり、今後の進路の選択等の一助になったと考えられる。

開催を知ったきっかけは「学校の先生からの紹介」が多数であり、テーマとなる分野に直接興味がなくとも、先生といった立場の人から勧められることで受講が強く促されるようである。ソーシャルワーカー養成の過程で十分な情報が与えられず、興味を持つきっかけが得られにくい依存症のような分野のイベントにおいては、そういった周知ルートを活用する必要があると感じられた。

理解度においては全員が何らかの理解を得ており、満足度においても１人を除いて何らかの満足を得ている。開催時間についても同様である。このことから、企画は適切であったと考えられる。

効果測定についての詳細は後述するが、依存症関連問題に関し、正しい知識の伝達、取り組む必要性の認識や意欲の向上についても、十分な効果が得られていた。

全体を通じて参加者に印象的であったのは、依存症支援の汎用性が高いこと、依存症支援では特に自己覚知や他者（人間）への洞察が必要であること、依存症支援ではクライエント本人だけではなく家族等の周囲への支援も必要であること、依存症支援ではソーシャルアクションが重要であること等のようであった。これらは企画意図と合致するものであり、狙いどおりのことが伝わったものと考えられる。

コロナ禍で他者との交流が制限されてきたこともあり、学生同士の交流は強い刺激となり、他者と比較することで見えてくる自己像の深まりは特に印象的だったようで、自由記載項目の多くで「自己覚知」がテーマとなっていた。そのことで、モチベーションを新たにした者、目標がはっきりとした者等、さまざまな効果（相互作用）が得られたと考えられる。

今後、同趣旨の企画を行う際には、依存症者の周囲への支援、特に「家族支援」をテーマとすることが推奨されるが、その際には、現役ソーシャルワーカーだけではなく、当事者の語りを入れることも検討に値する。グループワーク等で、学生が相互に刺激し合えるように演出することも必要である。また、今回は依存症の代表例として「アルコール」を取り上げたものが多くなったが、他の依存症を含めた依存症分野の広がりを意識したものにする必要があると考えられる。

効果測定

当初の設定項目は、以下の２点である。

①依存症に関する知識の向上や、誤解や偏見の解消が見られたか否か。

②大学等における普段の学びとの連続性により、依存症関連問題の軽減に向けた社会資源の構築や、サポートシステムの実現に寄与できるソーシャルワーク人材へと成長することにつながる研鑽となったか否か。

①に関し、依存症関連問題に関する正しい知識について21人（65.6％）が「かなり増えた」、10人（31.3％）が「少し増えた」と回答した。**誤解や偏見の解消に直結する「正しい知識」の**

レベルが、回答者の96.9％で上昇したという結果であった。その内容においても、いわゆる「自己治療仮説」を思わせるもの、依存症者の周囲に対するアプローチの必要性を指摘するもの等、**依存症を理解するうえで必須と考えられることへの気づき**があったことがうかがわれた。

②に関し、依存症関連問題に取り組む必要性の認識について28人（87.5％）が「かなり深まった」、4人（12.5％）が「少し深まった」と回答した。「必要性認識」のレベルが、全ての回答者で上昇したという結果であった。また、取り組む意欲について27人（84.4％）が「かなり上がった」、3人（9.4％）が「少し上がった」と回答した。「意欲」のレベルが、回答者の93.8％で上昇したという結果であった。つまり、**成長の前提である「必要性認識」と「意欲」のレベルが、ほとんどの回答者で上昇**したという結果であった。その内容においても、地域や社会へのアプローチを思わせるもの等、**社会資源やサポートシステムの充実への志向**（の芽生え）がうかがわれた。

以上より、**量的にも質的にも、十分な効果があった**と判断される。